

南方（南スラバヤ）

兵隊と通訳生活六カ年

長崎県 山田 千代治

私は昭和十三（一九三八）年五月、オランダ領東インドボルネオ島に在任しておりましたが、結婚をするため島原に帰ってきました。その折、徴兵検査が実施されました。私は、ボルネオの領事館に徴兵検査延期願いを出し、再度ボルネオに帰るつもりでありました。しかし、帰国した以上徴兵検査を受けよとの命令で検査を受けた結果、甲種合格となったため、南方に帰ることが出来ず、十二月十日、久留米の野砲第二十四連隊久保隊に入営しました。

毎日毎日、馬と一緒に演習です。演習が終われば馬の手入れの繰り返しの毎日でした。私は蹄鉄工務兵として一期の検閲を受け、検閲が終わると同年兵は次々と北支方面に転属となり、新しい補充兵が次々と入隊してきました。

この初年兵たちも一期の検閲が終わると全部戦地へ転属になり、私だけが残されるので不思議に思っ、人事係の舟木准尉に「私は何故戦地へ行けないのですか」と尋ねますと、舟木准尉は笑いながら、私の頭をコッコツ叩き、「ここが違うから他に働いてもらうため残しておるんだ、今暫くここで頑張れ、ここも戦場だよ」と言われましたが、戦場に行った同年兵のことが心に残りながらも、毎日毎日馬の装蹄訓練と、補充兵の指導に一生懸命頑張っておりました。

やがて師団司令部勤務と、徴兵勤務に替わりました
が、昭和十五年三月、師団司令部より三人が陸軍獣医
学校に派遣されました。南方に居住しておりました私
は、東京が見学できると思いつながら、喜び勇んで上京
致しましたが、初めての東京で勝手が判らず品川駅で
下車して駒場の獣医学校まで歩いて入校しました。

入校後は、馬についての勉強と実施訓練の連続でし
た。今でも忘れ得ないことは、閑院宮殿下のご乗馬の
装蹄をしたことです。よき想い出と記念になりました。

紀元二千六百年を迎え、記念式典が代々木の練兵場
で行われ、観兵式には天皇陛下も乗馬され、閲兵され
ますお姿を拝見することが出来ました。拝観も獣医学
校の生徒でありましたために出来たことで、すばらし
い観兵式の模様が今も目の前に浮かんできます。

また、福島県の軍馬補充隊の見学の機会が与えら
れ、帰りには宇都宮駅から中禅寺湖まで行軍をさせら
れ、これは大変な強行軍でしたが、お陰で日光東照宮
に参拝することが出来ました。

東京に帰ると、早々に卒業式があり、原隊に復帰
し、十一月十日、陸軍獣医部伍長に任ぜられ、一カ月
後に小倉の野戦重砲第五連隊に転任を命ぜられまし
た。

その後、間もなく検疫所要員となり、似島検疫所派
遣となりました。この検疫所は、戦地から帰って来る
軍人と軍馬は必ず検疫を受けてから上陸する重要な場
所でありましたために、特に馬の病気を検査し、もし
病馬を発見しますとその馬は似島に抑留し治療をいた
しました。

検疫所は、牧獣医少尉と軍曹一人、下士官として私
と、熊本の野口伍長と二人、兵十人と、地方人男女五
人が勤務し、大変多忙な勤務でありました。

検疫に合格した兵隊さんたちは、喜々として原隊へ
帰っていきますが、病気に侵された軍馬は似島に抑留
され治療を受けたり、処分される馬もおります。兵隊
と同じく戦地を駆け巡り、お国のために働いてくれた
ことを思いますと、可哀想で涙の出ることもしばしば
でした。

昭和十六年五月、私の原隊に動員令が下りましたので、急ぎ原隊に復帰しましたが、動員完結までは異動準備で大忙しでした。上司の大坪獣医中尉が私を呼び「山田伍長には妻がいるので一緒に連れていかぬ。内地に残りなさい」と言われ、「私は初めから戦地に行き一身をお国のために捧げる決意で入隊しました。戦地と同行出来ないのなら、妻とは離婚いたしますからどうぞ連れて行ってください、中尉殿」と一生懸命お願いをいたしました。「よく判った。それほどまで覚悟しているのならついて来い」と許してくださいました。

部隊は小倉から門司港まで夜間行軍で急ぎました。門司港では、「それ急げ」と船の積み込み作業が大変でした。安全を確認してから獣医見習士官と二人で、門司の街中の薬局より必要な薬品を買い集め、夜になって門司港を出港し、釜山港に向かいました。

釜山港に着港するや、馬を上陸させ、貨車に積み替えて、一路満州に向けて列車は走り出しました。着いた所は東安省興凱という所でした。幸い、兵舎も馬舎

もありましたので大変助かりました。

部隊は直ちに国境警備の配置に就き、ソ連軍の侵入に備えましたが、松岡全權大使が「日ソ不可侵条約」を締結されたため戦闘はなく、冬將軍を迎えることになりました。零下三十度、四十度の寒さのため、日本から連れて来た馬は寒さに耐え切れず次々と死亡し、可哀想で何度泣いたか判りません。

昭和十六年十二月、軍曹に昇進しましたが、私自身も病気になる、斐徳の陸軍病院に入院しました。やがて牡丹江の陸軍病院、次いで奉天の陸軍病院へと転送され、約半年療養、さらに大連の柳樹屯に転送され、そこから小倉の陸軍病院へ送られました。

続いて、野戦重砲兵第五連隊補充隊に転属され、養生中に、病院長が死亡され、葬儀の際、衛戍地の下士官でありましたため、皆の患者の代表として全員の指揮をとり、病院長をお見送り致しました。

三月十日、現役免除となり郷里島原に帰ってきました。健康も回復したので、再びお国のお役に立ちたい

と、昭和十八年六月、通訳の志願をしておりましたところ徴用令状が来ました。内容は南方情報要員という名目で、横須賀鎮守府に集合せよとのことで、横須賀に参りました。

要員は十二人で、集合所の手伝いなどをして出発の日を待ちました。そのうち、三人ぐらいが出発したが二、三日ぐらいたら帰ってきました。理由を聞きますと、船が次々とアメリカの潜水艦に撃沈されるので出航出来ないとの話をしてくれました。

いよいよ私達も出発です。船は先ず呉港に寄り、佐世保で船団を組み、交互に出航しました。最初に出航した船は、台湾沖で撃沈されたとの連絡があり、警戒しながら度々航路を変更し、やっとのことでシンガポールを経由して、ジャワ、スラバヤに到着し、ホッとしました。

私達の乗船した船に、珍しい車が積んでありましたので船員さんに聞くと「あれは豪州に持っていく秘密の車ですよ」と言っておりましたが、果たして無事に到着するだろうかと心配しながら下船しました。

スラバヤに着くと、海兵隊所属となり、第二南遣艦隊司令部を訪れますと、特務機関は満員になっているとのことで、私達はばらばらに分けられて、私は第三海軍上作部に通訳として勤務することになりました。総務課にいる時、内地よりの暗号電信が入り、戦艦「陸奥」が爆破されたとのニュースが伝わりましたが、この件は秘密事項として内密にされました。

上作部におりますと、第一線から船首が吹き飛んだままスラバヤに帰って来ており、海上での激戦を物語っております。飛行機の零戦も健在で活躍しておりました。当地は石油の産地であるため、「アメリカ軍の攻撃のたびに、石油が流出して火の海になります」と、住民が恐る恐る話をしてくれました。

任務地がバンジャルマシンに決まり隊長以下三十人が移動しました。バンジャルカという場所に飛行場の設営です。バンジャルとは汐が町いっばいになるという意味で、それが町名につけられております。

飛行場の設営される場所は、町から約四十キロ離れたマルカというゴム園の多い場所でした。作業をする

のに人数が必要のため、隊長から「ジャワの司令部に行き苦力（作業員）を二〇〇〇人応援を頼んでくれ」と命令されましたので、早速お願いに行き二〇〇〇人の作業員を受領し、「丹後丸」という貨物船に乗船させ、一路ボルネオに向かいました。

私は軍属の高等官待遇でしたから食事は船長と一緒です。幸いに米軍に発見されることなく、無事バンジャルマンに着き、二〇〇〇人の作業員（現地人）を工事現場に引率することが出来たので、施設局の人々も喜んでくれました。

幸い、入隊前に南方におりましたので、言葉が大変役に立ち、作業員や、町の人たちとの交渉は全て私に任され、隊長の次に私が存在し、皆から信頼されましたし、原住民に味方し、現場の食事は三食で十五銭貰い給料差し引きで、残った金は、野菜、果実、食器、衣料を買って作業員に分けてやって喜ばれました。

作業中にコンソリデーテッドB 24爆撃機が飛来して爆弾を落とす度ごとに防空壕に駆け込むので、作業もなかなか進みませんでした。連日の作業で疲れて倒れ

る者や病人が出ても病院が無いので、仮の病院を作りましたが、軍医が不足しておりませんでしたので、獣医学学校を出ていた私にも応援してくれと頼まれ、重病人は軍医が担当し、アミーバ赤痢やマラリア患者は私が注射しました。すると、現地の中国人までもが「頼む、頼む」と押しかけて来ますので、診察し治療してやりますと、「助かった、ありがとう」と、感謝のお礼を受け取るのが大変でした。

私は獣医学学校を卒業していたので、医療具は一通り持っておりましたので、人助けが出来て良かったと、自分ながら嬉しく思いました。後日のことですが、宇宙港へ引き上げた時にも、他の兵の医療品等は取り上げておりましたが、私が「アイアム、ドクター」と言ううと「OK、OK」と没収もせず通してくれましたので、自宅まで持ち帰りました。

飛行場の設営に続き、今度は自動車の部品類を購入してくれと命令を受けましたので、部下一人と共にシンカワン町の方面へ行きました。

私は入隊前、この町に居住しておりましたから知人

が多く、皆喜んで迎えてくれましたし、在庫品を私が言う通り販売してくれました。「山田が来ている」と人から人へ聞き伝えて、来てくれて歓迎してくれました。

華僑（中国人）の旦那衆はどうしているかと尋ねますと、大部分が殺害されてしまったというのです。それも日本の特務機関がスパイの嫌疑をかけて虐殺したのですと、悲しげに話をしてくれました。

その言葉に私も困りましたが、現地の人は良く協力をしてくれました。しかしせっかく協力してくれた品物を警備隊が差し押さえてしまいました。「私が軍の命令で購入した部品だ」と申し立ててもなかなか許可しないので困ってしまいました。幸いにも宿泊しておりました大和ホテルに歌手の藤山一郎さんがおられて、パンジャルマシンの「行くとおっしゃるので、事情を書いて隊長に渡してくださいとお願いました。

お陰で隊長に事情が通じ、軍の命令により購入した部品類とわかり、警備隊も許可してくれ、納入することが出来ました。入隊前に居住していたということ

と、友達のように原住民と話が出来たことで、隊長はじめ兵隊さんから大変喜ばれました。

戦前は日本人を神様のように尊敬しておりました居住民も、一部の日本兵が悪いことをするため、反日思想が燃え上がり、その上連合軍の空からの攻撃によって、日本軍や私達通訳まで山奥まで後退せねばならぬようになりました。

そのため、我々は八月十五日の終戦も知らぬまま、山奥で不自由な生活をせねばならぬになりました。十一月の末頃、「戦争は終わったぞ」との呼び掛けで山奥から街へ帰り、武装解除をさせられ、集結して自らの捕虜収容所のような建物を作り生活をしました。幸いにして、他の収容所のような強制労働等もなく、食物に苦しむこともなく毎日を過ごしました。

昭和二十一年五月初旬、リバティーに乗船させられ、ゲンバント港を出港し、五月二十日宇品港に着、検査を受け上陸いたしました。兵隊として満州で三年、通訳として南方で三年。軍隊生活の厳しさと、

戦争の悲劇を味わい、男としてのいい体験を味わってききました。

南方の通訳となつてからは、高等官待遇ということ
で、将校同様に宿舎も食物も与えられました。が、決
まった給料を貰うこともなく、原住民との交渉、苦力
の供給の手伝い等、爆撃を受けながら、走り回った
日々を忘れることは出来ません。

戦争によって、神様のように尊敬された日本人が敵
対されるようになり、あの悲しい想い出を二度と味
わってはならないと、深く心に刻み込んでいます。